

エコタウンは釜石はなんんだぞ、

東京大学社会科学研究所教授 中村圭介



Profile なかむら・けいすけ

1952年生。東京大学社会科学研究所教授。専攻は労使関係論。主な著書は『日本の職場と生産システム』『成果主義の真実』『実践！自治体の人事評価』など。

平成十六年、釜石市は国からエコタウンの認定を受けた。廃棄物ゼロを目指す環境調和型のまちづくりを進める街として認められたのだ。

ネットワーク

話はエコタウン認定の数年前にさかのぼる。釜石のことを思っただけで夢を語り、夢を実現させようと思える若い人々のネットワークがあった。市役所、釜石地方振興局、新日鐵、地元企業などに勤める若手が自主的に集い、まちの将来について語り合っていた。

最初は市内の有識者を招いて話を聞き、議論する小さな輪、それも市

役所職員若手有志の小さな輪だったらしい。それがさまざまな場所で活躍する若手を巻き込み大きなネットワークに成長していった。

エコタウンはここから生まれた。火力発電所（ちょうど建設中であった）に代わる新たなプロジェクトを考えてみないかとの、あるメンバーの呼び掛けがきっかけとなった。

エコタウン事業

新プロジェクトを模索する勉強会が始まる。メンバーの関心を集めたのは北九州市のエコタウン事業（使用済み自動車のリサイクル事業が中心）であった。エコタウンの認定を

受けると主体となる事業に対して国から補助がでる。

なかなか面白そうだった。しかも北九州と釜石は類似点が多い。新日鐵の事業所はあるし、社会基盤も似ている。企業誘致も低迷していた時期であった。このエコタウン事業で釜石を盛り上げ、雇用を確保できるかもしれない。メンバーたちはそう考えるようになっていった。

話はネットワークの外へと飛び出ていくことになる。自主的に勉強していたエコタウン事業が釜石市第五次総合計画「スクラム二十一プラン」（平成十三年三月策定）に取り入れられることになったのだ。翌十四年

一月には市長が「エコタウン事業を発展の大きな幹として、釜石百年の大計を打ち立てたい」と言うまでの事業へと発展する。こういうのをひょうたんから駒と思うのだと思う。

模索

だが、ここからが大変であった。何をエコタウン事業の柱とするのか。市の担当者を中心とする関係者の苦労が始まった。

何をどうやれば地域指定されるのかが分からない。廃棄物を出さないリサイクル事業、しかも先駆的な事業でなければならぬ。そうした事業を釜石で興してエコタウンの認定

を受ければよい。だが、その芽をどうやって見つけたらよいのか。

先駆的で進んだりサイクル技術、これを探さなければならぬ。最前線で頑張った担当者は次のように語る。「そんな技術なんか釜石にはないだろう。大学にはあるかもしれない。いい技術を持っていくんだけれど評価されなくて、事業化されないものがあるかもしれない。それを釜石の企業に紹介してマッチングさせよう」。大学の研究室に足を運び、新しい芽を探す毎日が続いた。大学には面白い技術はたくさんある。けれども未完成で、事業化には大きなリスクがある。それに市の命運をかけるわけにはいかない。担当

者の旅は終わらない。

マリントック釜石

ようやく探して国に話を持って行って「ここに先駆性があるのか」とはねられる。もうだめだと担当者が申請をあきらめかけた、ちょうどその時である。エコタウン事業にふさわしい企業が釜石にあることに気付くのである。灯台下暗しというべきか。

利用されずに廃棄されていた水産資源から機能性食品を生産することに成功していたマリントック釜石である。コンドロイチン、コラーゲンなど「健康の維持、回復に効果があることが科学的に証明されている食



エコタウン構想の拠点となる平田埋立地

品」のことである。ちなみに私は左ひざの軟骨がすり減っているためにコンドロイチンを服用している。

同じく廃棄されていた未利用水産資源から天然のうま味調味料を生産していた海拓舎のもう一つの顔、それがマリントック釜石である。

国の担当者も「結果的には釜石で最も優れているのはこれしかない。水産加工廃棄物リサイクルしかない。これでプランがでなかつたらもう止めなさい」と言ったという。

こうして釜石市はエコタウンの認定を受けることに成功した。総合計画の策定からすでに四年が経っていた。

意義

この物語は釜石にとって、とても意義あるものだと思ふ。なによりも、市役所、振興局、新日鐵、地元企業が協力しあって釜石の将来ビジョンを自分たちで作り上げたからだ。もちろん、それは一つの方向を指し示すものにすぎない。だが、誰かから与えられた見栄えのするきれいなビジョンではなく、五里霧中の状態で試行錯誤を繰り返して、自分たちで作り上げたものである。これが大切である。

地域社会再生の最も重要な主人公

は地域で育ち、暮らしている人々である。この当たり前のことを気付かせてくれる物語である。

「エコタウンなんだぞ、釜石は」と胸を張って言えるのは、国の認定があるからだけではない。マリントック釜石以外にも、使用済み自動車リサイクル事業を行うオートリサイクルセンター、及川工務店を中心に進められている廃プラスチックリサイクル事業、廃棄物資源化装置の開発に取り組むムゲンシテム、清掃工場の溶融炉から排出される残渣をリサイクルする事業など、廃棄物ゼロにかかわるいくつもの事業の束がすでに釜石に出来上がっている。

環境にやさしい企業ということであれば、ペレットストーブの石村工業、消臭・抗菌製品の釜石電機製作所を加えてもよい。

今回で私のつたない連載も終わります。私の釜石への思いを少しでも感じてくださったとすれば、それにまさる喜びはありません。貴重な紙面を与えてくださった釜石市には心より感謝いたします。